

三笑

シテ 恵遠禅師

ツレ 陶淵明

同 陸修静

地は 唐土

季は 十一月

シテサシ

「晋の惠遠廬山の下に居して。三十余年隠山を出でず。白蓮社を結び並びに十八の賢あり。其外数百人世を捨て榮を忘れて。共に西方を誦し六字を礼して此草庵に遊止す。

下歌

「かくて流れを枕とし。岩に口を漱ぎて。

上歌

「行住座臥の行ひに。く。座禪の床を洩る月も。西に傾くをりふしは。洞煙谷雲の内よりも。瀑布の滝の白妙に。あけぼのゝ山の姿。たとへん方ぞ

なかりける。

ツレ二人一声

「雲無心にして以て岫を出で。鳥飛ぶが如くに倦んで。還る事をや知らすらん。

歌

「頃もはや。霜降月の曙に。く。野山の草の色もはや。散る紅葉々に移ろひて。枯野になれど白菊の。花はさながら紅の。八入に見ゆるけしきかな。く。

淵明詞

「如何に此草庵に惠遠禪師の渡り候ふか。陶淵明陸

修静是まで参りて候。

シテ詞

「其時禅師は白蓮社を出で。書を以て淵明を招きければ。」

ツレ二人

「二人は共に拝をなし。」

地

「廬山のさかしき石橋を。心しづかに渡りつゝ。巖に腰をかけ。瀑布をながめ給へり。三千世界は眼に尽き。十二因縁は心の内に際もなし。」

淵詞

「如何に恵遠禅師に申すべき事の候。」

シテ詞

「何事にて候ふぞ。」

淵

「さて廬山に至らざらん者は。是れ僧にあらずと申し候ふよなふ。」

シテ

「実にく左様に申し候。」

淵

「さてく瀑布と云ふ事は。如何なる謂のあるやらん。」

シテ

「いやく異なる事はなし。万仞名を得て瀑布といふ。」

陸 「日香炉を照らして紫煙をなす。

シテ詞 「遠く見れば織るが如くにして天台に掛く。

淵 「宝尺を疑ふ事を休めよ度りがたし。

シテ 「直に金刀の剪裁し易きを恐る。

陸 「傾き来つて石上に春雷をなす。

淵 「知らんと欲す是銀河の水なる事を。

シテ 「人間に墮落して。

陸 「合して。

シテ 「却つて。

淵 「廻る。

地 「三国無双の此滝を。 今まで拝せぬ心こそ愚かなり
けれ。 もとより琴詩酒の友なれば。 心静かに昔を
いざや語らん。

クセ 「そもく此淵明と申すは。 彭沢の令となる。 官に
ある事八十余日。 印を解いて去るとかや。 日夜に
酒を愛し。 松菊を翫ぶ。 菊を東籬の下に採つて。

南山を見る事も。君に忠あるゆゑとかや。

シテ「又陸修静は。」

地「宋の明帝の御時に。仙の法を学んで。陸道士と申すとか。後には当山の簡寂観に。隠居してましませり。此人々は天下にも。並ぶ方もなき事なれば。

廬山の虎溪にも。劣らぬ光なりけり。

シテ「菊の白露積り積つて。不老不死の薬の泉。よも尽きじ。」

地「いく万代も限らじな。(舞)

地「さす盃の廻る夜も。く。明くれば暮るゝも白菊の。花を肴に立ち舞ふ袂。酒狂の舞とや人の見ん。

(楽)

シテ「万代を。」

地「万代を。く。松は久しき例なり。く。

シテ「年を老松も。緑は若木の姫小松。

地「四季にも同じ葉色の常磐木の。松菊を愛し。かな

たこなたへ。足もとは泥々々と。苔むす橋をよ
ろめき給へば。淵陸左右に介錯し給ひて。虎溪を
遥に出で給へば。淵明禪師に。さて禁足は破らせ
給ふかと。一度にどつと手を拍ち笑つて。三笑の
昔となりけり。

底本…国立国会図書館デジタルコレクション『謡曲評釈 第七輯』大和田建樹 著